

chapter

3

被害対策の基本



1

環境整備（生息環境管理）



3-1-1 餌場を減らす（農地・放任果樹）

餌場をなくす

野生動物が生活していくためには食べ物が必要である。生息域が拡大し個体数の増加も止まらない原因のひとつが地域に存在する様々な食べ物である。廃棄野菜や果実（写真3、4、5、6）、放任果樹（写真1）、無防備な田畑などは栄養を供給する餌場となっている。傷ついたものや形の悪いものなどは無造作に捨てられ、利用しない果樹は放任状態では増加するのは当然である。過去にはこれでも良かったかもしれないが現在は違う。野生動物が身近になった今は残さの管理（写真2）までが栽培技術である。これらをなくしていくことは生産者と地域の課題である。食べ物となるものを放置し、増加の手助けをしながら被害を減少させることはできない。被害を減少させたいと考えるのであれば無意識な食べ物放置が餌場となっている事実を地域全体で共有して行動することが求められる。

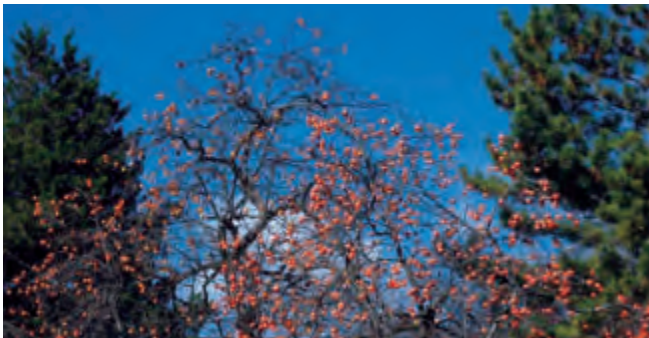


写真1 収穫しないかきは食べ物を長期間提供する



写真2 利用していない果樹は伐採する



写真3 廃棄されたぶどうは最高の栄養源



写真4 農地に果実を廃棄すると依存度が高くなる



写真5 すいかは潰さなければ長期間の栄養源になる



写真6 長期間餌場として利用されている廃棄場所

3-1-2 潜み場所の対策（ねぐらとなる神社仏閣・人家）

休息・繁殖場所をなくす

野生動物が生活していくためには安心して休息や繁殖できる場所が必要である。被害に関与する中型動物の行動域は人の生活圏周辺に存在する。休息や繁殖が家屋などの建物に依存しているからだ。とくに屋根裏や壁の隙間を利用するアライグマ、ハクビシン、テンなどは依存度が高い。地域の人口減少から空き家や管理不十分の建物が増加している現状がある。依存する動物はこれらを利用し生息域を拡大しながら増加している。建屋の空洞化問題はすぐには解決しない。むしろ拡大していくと推測される。

持続的な被害軽減のためには地域に住まわせないことが重要である。好適環境が増加しても侵入されなければ問題はないことから、侵入されない技術をしっかりと学ぶことが必要だ。個人の家屋であれば音や天井の染みに注意する。侵入は地上近くの床下と軒など上部が狙われ、床下は通風口（写真1、2）からが最も多い。上部は軒の破損部分（写真3、4）、瓦屋根の隙間、増築した継ぎ目などである。侵入場所が確認できたら塞ぐ作業になるが、中に居ないことを確認することを忘れてはいけない。塞ぐ資材は金属（写真5）や板（写真6）など丈夫なものを使用する。樹脂ネットや薄い合板などは破壊される可能性があるので使用しない。集会施設や神社・仏閣、空き家などは地域の問題として対応する。地域住民自らが点検を行い修繕箇所を共有し対策を進める。中型動物は目視で侵入できる場所を探す。人の目で確認できるような穴は確実に侵入されるので共同作業として修繕を行う。空き家は個人の所有物なので勝手に対処できないが、中型動物の行動域は複数の休息場で構成されているので、一か所だけでは生活できない。出来るところから侵入防止対策を行い休息場の選択肢を減らしていけば生息数は減少し被害の軽減につながるはずである。



写真1 床下通風口からの侵入が最も多い



写真2 頻繁に利用されている神社の床下侵入口



写真3 軒の壊れた場所は必ず狙われる



写真4 小さな穴を破行為により広げて侵入場所として利用

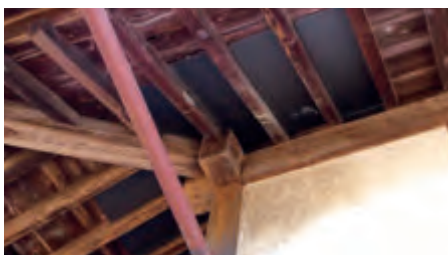


写真5 神社の軒にあった侵入口を金属板で修復



写真6 家屋の軒を板で修復